
こんなはずじゃなかったのに

URANUS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなはずじゃなかったのに

【Nコード】

N9781A

【作者名】

URANUS

【あらすじ】

校舎は真新しく寮もきれい、さらにリゾート施設のように娯楽施設まである人気学校に入学した主人公は幸せでいっぱいだった。しかし学校生活の中で何かがおかしいことに気づいてしまう……。・ちよつとラブありな学園コメディー、もしあなたがこんな学園に入学したらどうしますか？

プロローグ（前書き）

初めての投稿です 下手な文章ですが読んでくれればうれしいです
♪

ブローグ

私の名前は如月 キサラギ 綾女 アヤメ

私は今 これからの自分の運命を左右する大切な場所にいる。
今まさに私の運命が決まるというのだ

刻一刻と『その時』にむけ時間は過ぎていく

そしてついに『その時』はきた

私の目の前に現れた大きな板

そこに書かれているのは板を埋め尽くす数字たち……

私はその中である数字を探す。

「あ……」

「あつたーっ」

そう 私がいるのは受験の合格発表者を知らせる板の前、

私は受験戦争に勝ったのだ！！

なぜなら私の受けたこの高校は100年も続くお嬢様学校

去年から共学になってしまったのが残念だけど共学になると同時に
校舎もすべて新しくなり今年の受験では定員の4倍の人数が受験を
するほどの人気だ。

この高校の名前は「銀鈴学園」ギンレイガクエン

校舎とともに新しく作られた寮はピカピカで設備も整っていると人
気だ。

これからはこの学校で勉強できると思うだけでわくわくする
さあ これからがんばるぞーっ

プロローグ（後書き）

何かおかしいところがあったら教えてください！！

ちょっと変わった入学式？（前書き）

はなしがめちゃくちゃですが 読んでくれるとうれしいです♪
まだ文が下手なので皆様のアドバイスお待ちしています。

ちょっと変わった入学式？

どうも♪ 全国の美少女代表 如月 綾女です（笑
え？

自意識過剰じゃなかいかつて？

そんなことないよ 中学のミスコンでは優勝したもん！！

え？何で中学にミスコンがあるのかつて？

それは校長先生の趣味だったんですよ（汗

ちよつとおかしな中学だったので高校では普通の学園生活をした
と思ってるんです！

あ、今日は入学式なのに遅れちゃう（汗

もし遅刻したらこんなに話させた読者のみんなのせいだからね！！

（こらこら君が勝手にしゃべってたんだよ？）

作者は黙ってなさい！！

（はい）涙

ってこれじゃ本当に遅刻しちゃうじゃない！

では っ

てきます！！

急げー、これじゃ遅刻じゃないの

といいつつ事前に調べておいた最短ルートをもうダッシュする私

途中何かを弾き飛ばしたりした気もするけど今の私にそんなことを

気にしている余裕はない

・

・

・

やっとこのことで学校に着きました！

時計を見ると始まってしまふ時間の1分前・・・

急げ私 人間の限界を超えるんだ

一筋の影となって自分の名前の書かれたパイプいすに向かって駆ける私

席についた瞬間にチャイムが鳴る

どうやったら間に合ったようだ。

教頭らしき人物が壇上に現れたよくある挨拶をして壇上から降りていった。

その後も教員たちのあいさつなどが続いていきます。

くっ……眠い……教員たちはみんなラリホーがつかえるのか
！！？

そんなことを考えながらふと隣を見ると私より少し小柄な（私の身長は162・1cm）

少女が爆睡していました。

かわいい子だな……友達になれないかな
あ

教員の一人がこちらを見た……気がする

私は少女を起こす事にした

綾女「ねえ 先生がこっち見てるから起きてたほうがいいよ？ も
うすぐ式も終わると思うから。」

少女「ハッ もしかして……ボクねてました？」

綾女「ええ それはもう気持ちよさそうに。（笑）」

少女「起こしていただいてありがとうございます♪ 私の名前は桐^{キリ}
山^{ヤマ} 未来^{ミク}です よろしくお願いします。」

綾女「私の名前は如月 綾女よ、よろしくね ミクちゃん」

ミクちゃんはくりくりとした大きな目とボクという一人称がとてもかわいい女の子で、同姓の私でもおもわず抱きしめたくなるようなこでした。

ミクちゃんと話をしていたら突然体育館ないに音楽が流れ出す

・ ・ ・ なんで音楽が？ ・ ・ ・ しかもウルフルズのガッツだぜ！！？

唸然としていると壇上に初老の老人が上がってきた。

たぶんこの人が校長ね、まじめそうな人だけどこの音楽は何なの？

私が疑問に思っていると突然校長先生がしゃべりだした

校長「始めまして新入生の皆さん、私が校長・ ・ ・ ・」

音楽が流れたので何かおかしいことが始まると思いきや普通の挨拶だったので私の耳は聞くのと途中でやめた。

と そのとき壇上が爆発した。

・ ・ ・ 爆発？

煙がはれるとそこに立っていたのはピンクのスーツを着た校長がいた
・ ・ ・ ・ ピンク！！？

校長「そういうわけで・ ・ ・ レッツダンスタイム！！」

しまった・ ・ ・ きいてなかったから何が起きたか理解できない、
周りで唸然としてる生徒も同じだろう。

そのとき教頭が体育の教員が吹くような笛を鳴らすと警備員が数人
壇上に上がり抵抗する校長をどこかに連れて行ってしまった。

教頭「校長先生は急用のためお帰りになりました。」

急用！！？ ならしかたないよね。

一人納得する私。

教頭「まあ こんな話してもつまらないしめんどくさいのでさっ
さとクラスわけをしたいと思います。」

教頭がめんどくさいって言っちゃったよ！！？

この学校のクラスわけはきつと普通じゃないんだろぅなあとと思う私

ミク「この学校っておもしろいね」

この子は天然系みたいですね」

これから私たちは自分たちがどのクラスになるのか教頭の言葉を待
っていた・・・

続く
♪

どこで。ドア（前書き）

更新サボってました すいません!!

どこで。ドアー

今私たちの目の前には扉が並んでいる・・・
どこでもドア？

教頭

「いまから新入生諸君にはこの扉のなかに入ってもらう、この扉の先はクラスにつづいているが一つのクラスの定員は40人、定員をすぎるとその出口はしまってしまうので注意したまえ。では出口は五つがんばってくれたまえ。」

全校生徒の数は200（のはず）
ドアの数も約200だろう・・・

つまり 一人ひとりばらばら？ってことになるわけね

綾女「ミク これはどういう状況下理解できる？」

ミク「教頭先生がドラえもんじゃないことはりかいできてる」

やはりこの年齢のものはみんなドオえもんを想像するらしい。

とりあえずなかはどうなっているかわからないが行き着く先は同じらしいわね。

綾女「ここで戸惑っててもなにもはじまんないし行ってみようよ。」

ミク「そうだね」 私はおもしろければそれだけでいいんだけど」

この子の頭の中は温泉のようにのほほんとしてるらしいね」

そういつて私たちは扉の前に立つ。

綾女「じゃあ」

綾女&ミク「いこう！」

そついつて私たちは扉を開けた。はずだった・・・

ここどこですか！！？

扉を開けるとそこには不気味な洞窟のようなばしょだった。

なにこれ ワープですか？ついに常識から一歩ずれちゃったんですかい。

とりあえず私は先に進むことにする。

先に進むと早速扉を発見！やっぱ私ってついてる♪

その扉には 『3人限定』と書かれている。

限定ですか ってことはやっぱ近道？ 読者の皆さん教えてください……い……い……

さあ綾女選手ここでテレフォンを選択！

電話がつながってる先は……

綾女「読者Y・M。もしこのイニシャルに該当する人がいるなら、すぐに

この先がどうなってるか答えなさい！！ 連絡先は090-0000

O - ▲▲
L

（イニシャルに該当されたかたがいましても、決して綾女に電話をかけないでください。BY作者）

うち作者の邪魔が入ったか……イニシャルだけなら数人は該当してる人がいたと思うのに……

読者のコメントを待ったらたぶん数日は進めないと思ったので私は扉を開けることにした。

扉の先にあつたのはさらに三個の扉

1・いい子しか入っちゃいけない扉

2・友達が多い子の扉

3・魔法少女のみが入れる不思議な扉

……3番は何なのかしら……作者の趣味じゃないことだけいっとくわね

（ありがとうございます 今度お礼にいい出会いを書かせていただきます）

私は心の中で「よっしやああ」と叫ぶ 作者ほど貸しを作って得する相手はいないと思う。

とりあえず私は1&2両方ともがいとうするから・・・
とりあえず1ね♪ いいこだしネ？

そう思いながら1番をあけると中にあるのは大きな箱
何かお助けアイテムが！！？

そうおもいながら近づくとカタカタ動いているのがわかる。
とりあえず蹴りを一発。

豪快に吹っ飛ぶ箱の中から少年が転がり出てきた・・・なぜか和服で・・・

少年A「今の衝撃は何ですか！！？」

綾女「嵐よ♪」

しまった ここ洞窟だっけ・・・嵐なわけないジャン。

少年A「嵐ですか・・・怪我しなくて幸いですね。」

すばらしい微笑みを私に向けながらそういう天然系少年。

このごろ天然系出るの多いな

少年A「私の名前は新田^{アラタ}長成^{ナガナリ}です。いちおう陰陽師やつてるんで

困ったときにはいつてください。 占いから呪殺までなんでもやってますから。」

そついう物騒なことをさわやかな笑みとともに言う少年Aあらため長成。

綾女「じゃあ 出口を教えてください。」

長成「お安い御用です♪ 任せてください」

なんか 展開がよすぎるな・・・まさか！！？

作者 さっき言った「いい出会い」ってこのことなの！！

いやだ 私はかつこいい人にあいたいの！

長成だつて顔いいけど なんか特殊な人だよ。

私は普通がいいの！！

長成「わかりました ご案内しますね」

そういつて歩き始める長成、私は急いでその後を追う・・・

・・・

・・・

・

しばらく歩いたところに大きな岩があった、そこには「いちねん
いちくみ」と書かれていた

ひらがなで・・・

綾女「これが扉？」

長成「そのようですね じゃあ行きましょうか」

そういつて岩にむかいダッシュで突っ込む長成。

ゴッソ

あ・・・死んだ・・・かな？

ムク

あ 起き上がった・・・目が据わってる気がするけど

長成「ボクをコケにするとはいいい度胸をしていますね・・・ムニャ

ムニャ」

なんか唱えたかと思うと岩に亀裂が走る。

すごい 本当に陰陽師なんだ・・・

その亀裂の向こうに見えるのは普通の教室・・・

綾女「ストップストップ！！」

しかし長成は一心不乱に何かを唱えている。

あ・・・このまま割れたら亀裂がなくなっちゃう（崩れちゃう）

こうなったら・・

ドガ

私は彼の頭をその辺の石で殴り昏倒させ危機を乗り切ることに成功した

そしてその亀裂の中に入る・・

つと一応こいつのおかげでここまでこれたんだし

そうおもいながら彼を亀裂に投げ込む。

頭が岩に当たったがキニシナイ♪

そうして私たちは教室（らしき場所）に入っていった

綾女の戦績

箱破壊 10ポイント

長成 撃破 50ポイント

合計 60ポイント

1000ポイントたまると読者の皆さんの考えたことが実現します

・・・たぶん

（嘘ですごめんなさい）

どこで。ドア（後書き）

読者様のかんがえはメッセージで書いていただけるとうれしいです
作品制作になにとぞ手を貸してください

友達できちゃった♪（前書き）

ネタはあるのに話しがまとまらないのでなかなか更新できません。
腑抜けな作者をお許しください

友達できちゃった♪

教室に着いた私たちですが教室に入っても他には誰もいませんでした。

もしかして1番？

なんか気分がいいわね

私は長成君をその辺に寝かせて（投げ捨てて）改めて自分たちの入ってきた教室の入り口を見る、しかしそこはもう普通の廊下だった。え？

さっきの岩は・・・

深く考えても始まらないので私は考えるのをやめた。

そしてそれから数分の間 私は暇なので唸っている長成をつついたりひっぱったりして遊んでいた。

やばい・・・これおもしろいかも・・・

遊びが暴力に変わりそうになったそのとき、開いたままになっていた教室の入り口に知らない二人組みが現れた。

少女A「あれ・・・」

少女B「もしかしてゴールなんじゃないのー!!」

綾女「ご苦労様♪ 一番乗りは私がもらったわよ」

少女C「始めまして 私は星宮 蒼ホシミヤノウと申します これから同じクラスですごさせていたたくようですし 仲良くしてください」

うわ・・・すごい落ち着いてるなこの子

私が多少（？）挑発気味に挨拶をしたのに笑顔で返してきた。

蒼と名乗ったこの子の特徴は一言で言うなら「ちび」ってところかな
蒼「今大変失礼なことを考えていませんでしたか？」

！！ 鋭いな・・・子の子は只者じゃない気がする・・・

少女C「ちよつと蒼 初めて会う人脅しちゃだめでしょ。あ 取り
乱してスイマセン！ 私は猩紅 楓（ショウコウカエデ）とい
います。よろしくね」

こっちのこはまともかな、身長は平均的 ショートカットのいか
にも運動できます！って感じの子だ。 ちなみに蒼はロングのスト
ートである。

綾女「つと 自己紹介がまだでしたね、私の名前は如月 綾女よ、
二人ともよろしく！」

初めて会う人には3割り増しで猫をかぶるのを忘れない。
それから私たち（長成はまだおきない）はほかの人がだんだんと集
まる中私たちは仲良く談笑していた。

39人までそろったところで校内放送が入る。

教頭「ただ今 生徒が全員クラスにたどり着きました」

39人しかいませんが？

教頭「一人欠席のためその生徒は人数が足りていないクラスに入る
こととします。 以上放送終わり！！」

終わりってあなた・・・めんどくさいのかな？

そういつていると教員らしき人物が入ってきた

教員（？）「皆さん おつかれさまでした。今日はとくにすること

がないので帰ってくださいっても結構です。」

ほんとにこれで終わりかよ！

あんなのが担任なのかな・・・担任じゃないといいな。

そう思いながら私は 仲良くなった二人と帰宅することにした。

このとき私は知らなかった。

明日から地獄が待っているなんて・・・

長成はいまだ放置されています。
続く♪

長成「誰か助けてくださいー！！グスン」涙

友達できちやった♪（後書き）

ネタ募集中です

ハプニング（前編）

次の日（金曜日）・・・

突然ですが私は今リビングで両親と会話をしています、しかも軽く涙目です。

え？

何でこんなにあせているかって？

それは両親が世界旅行に行つて来ると言うのです（二人で）。

しかも何年もかけていくというのですから困ったものです！

しかも仕送りは食費のみ、小遣いは自分で稼げということです。ひどくありませんか？

そうやって私が涙流していると笑顔で玄関から大きなトランクとともに出て行つてるし・・・

数分考え込んでいたのですが学校に行く時間がきちゃったので急いで制服に着替えパンを口にくわえ家をでる。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

少し余裕を持つて学校に着いたけど、教室にはまだ人がまり着てないようね。

と 教室の一角に知った顔を発見！

私はその少女に向かって走り出す、そしてだんだんと速度を上げ・
・

「おっはよう」

と叫びながらラリアットをくりだす、しかしそのターゲットは平然とした態度でそれを軽く受け流す こいつ・・・できる！！

??「おはよ・・・綾女ちゃんは朝から元気だね」

そういった少女は未来だった、クラスが決まった日に私はほかの少女と戯れていて気がつかなかったがこのこも同じクラスだったのである。

そこで（いきなり？）私は未来に親が出て行ってしまいかねがないのでどうしよう？と相談してみることにした。

未来の返事は

「お金がないなら稼げばいい、稼ぐならやっぱり夢とロマンの詰まった宝くじよ！」

というものだった。お金が入るまでには長い年月とかなりの元手が必要であることが予想できる。

もともと私の家は金持ち（比較的）なのでお金に関して困ったことは一度もない、だが親がそのお金の詰まった通帳ごと消えてしまったのではお金はまったくといっていいほどなくなってしまったわけである。

そんなこんなで私は悩んでいると例の二人がやってきたのである。

蒼「おはようございます　おふた方」

楓「二人ともおっはよう　綾女はなんか暗そうじゃん？　あさっぱ
らからどうしたの？」

比較的まともな蒼がきたことに喜びを感じた私は早速二人に相談を
するのであった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9781a/>

こんなはずじゃなかったのに

2010年10月9日08時23分発行